

企業団設立趣意

□ 大阪広域水道企業団の設立について

◇ 社会的背景

- ・府域の水道事業は、戦後の人口急増と経済発展による水道水源確保の必要性和市町村間の重複投資を避けるため、市町村が大阪府に対して用水供給事業の要請を行った。大阪府は、淀川、琵琶湖などの水源確保とともに、浄水場や送水施設等を整備して用水供給事業を開始し、現在に至るまで、府内42市町村に安全、安心な水を安定的に供給してきた。
- ・近年においては人口減少期に入り、水需要が減少してきたことにより、府域の水道事業の課題は、水源確保や拡張整備といった新たな需要への対応から、取水、浄水、送水、配水までのシステムの維持・更新へと変化しており、また一方で、一部の市町村は、団塊の世代の退職による技術の承継や施設更新に係る財政負担など、厳しい経営課題を抱えている。
- ・地方分権の時代にあつて、水道事業の質的变化や課題に対応し、経営基盤を強化しつつ府域全域に、安全・安心な水を、将来にわたって安定的かつ低廉に供給していくためには、府域の水道事業をトータルで考えた場合、大阪府が用水供給事業を続けるのではなく、より住民に近い市町村が用水供給事業を直接担うことで、自ら経営・事業計画、料金を決定し、あわせて市町村水道事業との連携拡大や広域化を進めていくことが重要である。

◇ 企業団の設立

- ・こうした共通認識に立ち、このたび、大阪広域水道企業団を設立するものである。
- ・なお、企業団設立に当たっては、これまで府営水道が42市町村共有の水源としての役割に鑑み、統一料金により用水供給事業を行ってきたことを踏まえ、府営水道の事業を引き継ぐ企業団においても、構成団体への用水供給料金について統一料金により運営するものとする。
- ・また、用水供給事業の円滑な移管を図るため、現在の府営水道の施設、人員の承継など、大阪府の全面的な協力の下、市町村が一丸となって事業を開始するものとする。

□ 企業団像 ～タフでスリムな企業団経営～

◇ エンドユーザーの立場で経営改革

・給水安定性の向上

府営水道は、平成 17 年度に策定した「長期施設整備基本計画」について、水需要の減少や市町村からの要望を踏まえた見直しを行い、平成 22 年 5 月、新たな「施設整備マスタープラン」を策定した。

このプランは、水需要予測に基づく効率的な施設更新と既存施設の有効活用、震災時にも都市機能の維持が可能な水の供給、受水市町村の広域化支援、安定給水の強化を柱として、市町村の意見を反映しながら策定されたものであり、企業団設立後も基本的には引き継ぐこととする。

企業団設立後は、今後の情勢変化に応じた計画内容の見直しや、事業実施段階での効率化の検討など、適切に対応していく。

・組織のスリム化・事業の効率化

府営水道は、これまでも浄水場の運用管理の一元化など人員削減に取り組んできたが、企業団設立後は、経営や計画等コア部門の少数精鋭化や、安定給水の確保と費用対効果を勘案しつつ事業部門の更なるアウトソーシングなど組織のスリム化を推進するとともに、市町村で設立する企業団の強みを活かし、市町村水道事業との連携を拡大し、用水供給事業と市町村水道事業の効率化を進める。

・更なる用水供給料金の値下げ

府の経営収支シミュレーションでは、水需要の減少や府営水道の値下げによる減収、水源からの撤退に係る費用を見込んでも、平成 25 年度からは琵琶湖総合開発事業に係る減価償却費約 50 億円／年が減少し、長期にわたる施設整備に要する事業費も大幅に減少していくことが示されている。

これを踏まえれば、設立後の企業団において、事業の効率化を図りながら、更なる料金値下げが追求でき、施設の維持・更新に係る財政負担など厳しい経営課題に直面している市町村の経営基盤の強化につなげることができる。

企業団として経営の効率化を図る中で、安定給水に留意しつつ、更なる値下げに向けて積極的な対応を図っていく。

◇ 参画自治体の創意と総意で事業を推進

市町村が共同で企業団を設立する最大のメリットは、住民に身近な基礎自治体である市町村が、直接経営することにある。

健全経営を見込む企業団の経営を、自らの意志決定で更にスリムで効率よく改善できるとともに、住民の視点に立った事業に変えていくことができる。

企業団には議決機関として議会を置くこととなるが、このほか、経営や事業計画に関する重要事項を審議し、政策決定していくべく、首長会議・運営協議会を設置するなど、すべての構成団体が知恵を出し合い、その総意で運営を行う。

◇ 市町村水道事業と連携した事業実施

・人材の共有化、育成

企業団職員と市町村職員の人事交流などによる人材育成に加え、退職技術者等を登録し、要請に応じて派遣する仕組みとして、人材バンクを創設するなど、企業団事業と市町村水道事業の効率的な人員交流システムを構築していく。

・施設の共有化

投資や維持管理費の削減のため、今後の施設整備に当たって、企業団と市町村水道事業の施設の共有化を検討するなど、一層の効率化を図る。

・業務の共同化

効率的な業務執行を図るため、現在実施している市町村水道事業との共同水質検査体制の拡充や送配水設備の点検、設計・監督業務など共通事務の受託、薬品や送配水管など共通資材の購入、災害用備蓄資材の共有化等、業務の共同化を進める。

◇ 広域化に向けて

企業団設立後、当面は、用水供給事業のほかに、市町村水道の水質共同検査や技術支援、事務の共同処理、水道事業の受託を行っていくことにより、用水供給事業と市町村水道事業との連携拡大を図る。

より一層効率化を図っていくため、施設整備水準の格差などの課題の解消方策について検討し、市町村の意向を踏まえつつ、将来的には大阪市を含め、更なる広域化を推進する。

また、企業団に市町村との連携拡大や広域化を推進する組織を設置する。

◇ 工業用水道事業の実施

・背景

工業用水道は、堺・泉北臨海工業地域における産業基盤整備として、また、北摂、東大阪、泉州地域の地盤沈下対策として、大阪府において水源確保、施設整備が実施され、用水供給事業と一体的に運営されており、現在、25市2町の約460の事業所に給水している。

産業構造の変化や企業の節水努力により給水量は減少傾向にあり、今後、大幅な給水区域の拡大や事業拡張は見込めないものの、平成21年には堺浜への進出企業に供給を開始するなど、府域の経済発展に資する産業インフラとして、今後も重要な使命を担っている。

・経営状況

事業経営については、現在、単年度損益、累積損益とも黒字となっており、建設改良積立金の充実を図るなど、経営状況は安定している。

なお、21年度当初に料金制度の改定が行われ、改定時の経営収支シミュレーションでは、22年度は単年度赤字が見込まれているが、その後は単年度損益も黒字に転換し、琵琶湖総合開発事業に係る減価償却費の減少により黒字が拡大する見込みであり、この間も累積損益は黒字が継続するなど、健全経営が維持されるものと考えられる。

・用水供給事業との一体的経営

工業用水道事業については水道法と異なり、市町村による実施の原則はない。

しかしながら、府営水道では両事業の浄水処理や送水管理などの一体的な監視制御など施設の共有化に加え、人材の有効活用など、用水供給事業と一体的に運営することにより両事業とも効率的に運営が行われている。このことが用水供給事業の効率的な経営に寄与しており、引き続き、効率的な運営と利用者への安定送水を担保することが住民の利益に資するものとの認識に立ち、企業団において実施していく。

◇ 大阪府との連携

- ・用水供給事業については、府域の水道事業を指導・監督する立場にあり、また「広域的水道整備計画」策定主体でもある府水道行政部門の協力は重要であり、市町村水道事業の経営基盤強化や広域化に向けて積極的な対応を、また、工業用水道事業については産業政策との関わりがあることから、企業団との緊密な連携を大阪府に要請する。